

鶯鳥

幸田露伴

青空文庫

ガラーリ

格子こうしの開あく音がした。茶の間に居た細君さいくんは、誰だれかしらんと思つたらしく、つと立上つて物の隙すきからちよつと窺うかがつたが、それがいつも今頃いまごろ帰るはずの夫むかだったと解わかると、すぐとそのままに出て、

「お帰りなさいまし。」

と、ぞんざいに挨拶あいさつして迎むかえた。ぞんざいというと非難するようには聞えるが、そうではない、シネクネと身体からだにシナを付けて、語音に礼儀れいぎの潤うるおいを持たせて、奥様おくさまらしく気取つて挨拶するようなことはこの細君の夫の不得手ふえてで、褒ほめて云いえば真率しんそつなのである。それもその道理で、夫は今でこそ若崎先生わかざき、とか何とか云われているものの、本もとは云わば職人で、その職人だった頃には一ト通りでは無い貧苦ひんくと戦つてきた幾年いくねんの間を浮世うきよとやり合つて、よく搦手からめてを守りおおさせたいわゆるオカミサンであつたのであるし、それによ来こころじつてが古風実体たぢな質で、身なり髪かみかたちも余り気にせぬので、まだそれほど年では無いが、もはや中婆ちゆうばアさんに見えかかつて位である。

「ア、帰つたよ。」

と夫が優しく答えたことなどは、いつの日にも無いことではあったが、それでも夫は神経が敏びんくて、受けこたえにまめで、誰たれに対むかつても自然と愛想あいそ好よく、日々家へ歸つて来る時立迎むかひえると、こちらでもあちらを見る、あちらでもこちらを見る、イヤ、何も互たがいにワザと見るといふのでも無いが、自然と相見あひまるその時に、夫の眼めの中に和やわらかな心、「お前も平安、おれも平安、お互しあいに仕合あせだナア」と、それほど立入すつた細かい筋路すじみちがある訳では無いが、何となく和わらくの満足を示すようなものが見える。その別に取立とけて云うほどの何があるでも無い眼を見て、初めて夫がホントに歸つて来たような気がし、そしてまた自分がこの人の家内かないであり、半身であると無意識的に感じると同時に、吾わが身が夫の身のまわりに附ついてまわつて夫を扱あつかい、衣類いりを着換きかえさせてやったり、坐ざを定めさせてやったり、何にかにか自分の心を夫に添そわせて働はたらくようになる。それがこの数年の定じよう跡せきであった。ところが今日きようはどういうものであろう。その一ト眼ひとめが自分には全く与あたえられなかった。夫はまるで自分というものの居ることを忘れはてているよう、夫は夫、わたしはわたしで、別々の世界に居るもののように見えた。物は失われてから真まの価あたいがわかる。今になつて毎日まいにちの何でも無かつたその一ト眼ひとめが貴たつといものであつたことが悟さとられた。と、いうように何も明白に順序立しらべてて自然に感じられるわけでは無いが、何かしら物苦ものくるしい淋さびしい不安な

ものが自分に逼せまつて来るのを妻は感じた。それは、いつもの通りに、古代の人のような帽ぼう子うし——というよりは冠かんむりを脱ぬぎ、天神てんじん様のさまのような服を着換かえさせる間にも、いかにも不機ふき嫌げんのように、真面目まじめではあるが、勇いさみの無い、沈しずんだ、沈しずんで行きつつあるような夫よの様よう子うすで、妻はそう感じたのであつた。

永なが年ねん連つれ添そう間まには、何家どこでも夫婦ふうふの間に晴天せい和わ風ふうばかりは無い。夫おが妻めに対してたいして随ずい分ぶん強い不ふ満まんを抱いだくことも有り、妻めが夫おに対してたいして口く惜やしい厭いやな思おもいをするすることもある。その最はなも甚はなしい時ときに、自分おれは悪い癖くせで、女おんなだてらに、少しガサツなところの有ある性しょう分ぶんか知しらぬが、ツイ荒あい物もの言いいもするが、夫おはいよいよ怒おこるとなると、勘かん高たかい声こゑで人の胸むねにささるさるような口くちをきくのも止やめてしまつて、黙だまつて何も言いわなくなり、こちらこちらに對たいつて眼まなこは開あいていても物ものを見みないかのようなになる。それが今日きょうの今いまのような調ちょう子うし合あひだ。妙みょうなところところに夫おは坐すわり込こんだ。細さい工く場ば、それは土間どまになつているところと、居間いまとが續ついていゝる、その居間いまの端はし、一段低ひくなつていゝる細さい工く場ばを、横よこにしてそつちを見みながら坐すつたのである。仕方しがない、そこへ茶ちやをもつて行いつた。熱あついもぬるいも知しらぬような風ふうに飲のんだ。顔か色いろが冴さえない、氣きが何なにかに粘ねばつていゝる。自分おれに對たいして甚ししく憎ぞう悪あくでもしていゝるかとちよつと感かんじたが、自分おれには何なにも心こゝろ当あたりも無い。で、

「どうかなさいましたか。」

と訊く。返辞が無い。

「気色が悪いのじゃなくて。」

とまた訊くと、うるさいと云わぬばかりに、

「何とも無い。」

附き穂が無いという返辞の仕方だ。何とも無いと云われても、どうも何か有るに違いない。内の人の身分が好くなり、交際が上つて来るにつけ、わたしが足らぬ、つり合い足らぬと他の人達に思われ云われはせぬかという女気の案じがなくも無いので、自分の事かしらんとまたちよつと疑つたが、どうもそうでも無いらしい。

定まつて晩酌を取るといふのでなく、もとより謹直儉約の主人であり、自分も夫に酒を飲まれるようなことは嫌いなものではあるが、それでも少し飲むと賑やかに機嫌好くなって、罪も無く興じる主人である。そこで、

「晩には何か取りまして、ひさしぶりで一本あげましようか。」

と云つた。近来大に進歩して、細君はこの提議をしたのである。ところが、

「なぜサ。」

と善良な夫は反問の言外に明らかにそんなことはせずとよいと否定してしまった。是非も無い、簡素な晩食は平常の通りに済まされたが、主人の様子は平常の通りでは無かった。激しているのでも無く、怖れているのでも無いらしい。が、何かと談話をしてその糸口を引出そうとしても、夫はうるさがるばかりであった。サア、まことの糟糠の妻たる夫思いの細君はついに堪えかねて、真正面から、

「あなたは今日はどうかなさつたの。」
と逼って訊いた。

「どうもしない。」

「だって。……わたしの事？」

「ナーニ。」

「それならお勤先の事？」

「ウウ、マアそうサ。」

「マアそうサなんて、変な仰り様ネ。どういうこと？」

「……………」

「辞職？」

と聞いたのは、吾が夫と中村という人とは他の教官達とは全く出が異つていて、肌合の職人風のところが引装わしてもどこかで出る、それは学校なんぞというものとは映りの悪いことである。それを仲の好い二人が笑つて話合つていた折々のあるのを知つていたからである。

「ナーニ。」

「免職？ 御さとし免職つてことが有るつてネ。もしか免職なんていうんなら、わたしや聴きやしない。あなたなんか、ヤイヤイ云われて貰われたレッキとした堅気のお嬢さんみたようなもので、それを免職と云えば無理離縁のようなものですからネ。」

「誰も免職とも何とも云つてはいないよ。お先ツ走り！ うるさいネ。」

「そんならどうしたの？ 誰か高慢チキな意地悪と喧嘩でもしたの。」

「イヤヤ。」

「そんなら……」

「うるさいね。」

「だって……」

「うるさいッ。」

「オヤ、けんどんですネ、人が一生懸命いっしょうけんめいになつて訊きいてるのに。何でそんなに沈んで
いるのです？」

「別に沈んじやいない。」

「イイエ、沈んでいます。かわいそうに。何でそんなに。」

「かわいそうに、は好かつたネ、ハハハハ。」

「人をはぐらかすものじやありませんよ。ホン気になつてゐるものを。サ、なんで、そん
なに……。なんでですよ。」

「ひとりでにかなア。」

「マア！ 何も隠かくさなくつたツていいじやありませんか。どういふ入り訳いわけなんですか聴か
せて下さい。実はコレコレとネ。女だつて、わたしあ、あなたの忠臣ちゆうしんじやありません
か。」

忠臣という言葉は少し奇異きいに用いられたが、この人にしてはごもつともであつた。実際
この主人の忠臣であるに疑うたがはない。しかし主人の耳にも浄瑠璃じようるりなどに出る忠臣という
語に連関して聞えたか、

「話セツて云つたつて、隠すのじや無いが、おんなわらべの知る事ならずサ。」

浄瑠璃の行われる西の人だったから、主人は偶然に用いた語り物の言葉を用いたのだが、同じく西の人で、これを知っていたところの真率で善良で忠誠な細君はカツとなつて唄つた。が、直にまた悲痛な顔になつて堪え涙をうるませた。自分の軽視されたというのとよりも、夫の胸の中に在るものが真に女わらべの知るには余るものであらうと感じて、なおさら心配に堪えなくなつたのである。

格子戸は一つ格子戸である。しかし明ける音は人々で異なる。夫の明けた音は細君の耳には必ず夫の明けた音と聞えて、百に一つの間違ふことは無い。それが今日は、夫の明けた音とは聞えず、ハテ誰が来たかというように聞えた。今その格子戸を明けるにつけて、細君はまた今更に物を思いながら外へ出た。まだ暮れたばかりの初夏の谷中の風は上野つづきだけに涼しく心よかつた。ごく懇意でありまたごく近くである同じ谷中の夫の同僚の中村の家を訪い、その細君に立話しをして、中村に吾家へ遊びに来てもらうことを請うたのである。中村の細君は、何、あなた、ご心配になるようなことではございません、何でもかえつてお喜びになるような事がお有りのはずに、チラと承りました、しかし宅は必ず伺わせますよう致しましょう、と請合つてくれた。同じ立場に在る者は同じような感情を懷いて互によく理解し合うものであるから、中村の細君が一も二も無く若崎の細君の

云う通りになつてくれたのもあるうが、一つには平常いづも同じような身分の出といふところからごくごく両家が心安くし合い、また一つには若崎が多くは常に中村の原型によつてこれを鑄いることをする芸術上の兄弟きょうだい分ぶんのような関係から、自然と離はなれ難がたき仲になつていた故もあつたらう。若崎の細さい君くんはいそいそとして歸つた。

○

顔も大きいが身体からだも大きくゆつたりとしてゐる上に、職人上りとは誰にも見せぬふさふさとした鬚あひげ上うわひげ髭ほおひげ頬ほを無遠慮ぶえんりよに生はやしてゐるので、なかなか立派に見える中村が、客座にどつしりと構かまえて鷹揚おうようにまださほどは居ぬ蚊かを吾家うちから提さげた大きな雅がな団だん扇あふぎで緩ゆるく払はらいながら、逼せまらぬ気味きみ合あいで眼のまわりに皺しわを湛たえつつも、何か話すところは実に堂々として、どうしても兄分である。そしてまたこの家の主人やに対して先せん輩ばいたる情愛じやうあいと貫かん禄ろくとをもつて臨まんでゐる綽しゃく々しやくとして余裕よゆうある態度は、いかにもこの細君さいくんをしてその来訪らいぼうを需もとめさせただけのことは有る。これに対座してゐる主人は瘦やせ形がた小づくりといふほどでも無いが対手あいてが対手あいてだけに、まだ幅はばが足らぬように見える。しかしよしや大智だいち

深智しんちでないまでも、相応あうどうに鋭い智慧才覚ちえが、恐ろしい負けぬ氣を後盾うしろだてにしてまめに働うき、どこかにコツツリとした、人には決して圧潰おしつぶされぬもののあることを思わせる。

客は無雜作むざうさに、

「奥さん。トいう訳だけで、ほかに何があったのでも無いのですから、まわり氣きの苦勞くろうはなさらないでいいのですヨ。おめでたいことじゃありませんかね、ハハハ。」

と朗ほがらかに笑った。ここの細君ここのは今今はもう暗雲いっそうを一掃いっそうされてしまつて、そこは女だ、ただもう喜びと安心とを心配の代りに得て、大風たいふうの吹ふいた後の心持で、主客の間の茶盆ちやぼんの位置ちゐをちよつと直しながら、軽く頭かしらを下くだげて、

「イエもう、業わざの上の工夫くくふうに惚ほげていたと解とりますれば何のこともございませぬ。ホントにこの人は今今までに随分ずいぶんこんなこともございましたツケ。」

と云つた。客と主人との間の話で、今日学校で主人が校長から命ぜられた、それは一週間ばかり後に天子様が学校へご臨幸りんこう下さる、その折に主人が御前ごぜんで製作たたくをしてご覽らんに入れるよう、そしてその製品たたくを直ただちに、学校から献納けんのうし、お持帰りもいたたくということだつたのが、解つたのであつた。それで主人の真面目まじめ顔かほをしていたのは、その事に深く心こゝろを入れていたため、別にほかに何があつたのでもない、と自然ふんみょうに分ぶん明めいしたから、細君うれいは憂うれ

を転じて喜と為し得た訳だったが、それも中村さんが、チヨクに遊びに来られたお蔭で分つたと、上機嫌になつたのであつた。

女は上機嫌になると、とかくに下らない不必要なことを饒舌り出して、それが自分の才能でもあるような顔をするものだが、この細君は夫の厳しい教育を受けてか、その性分からか、幸にそういうことは無い人であつた。純粋な感謝の念の籠つたおじぎを一つボクリとして引退つてしまつた。主人はもつと早く引退つてもよかつたと思つていらしく、客もまたあるいはそうなのか、細君が去つてしまふとかえつて二人は解放されたような様子になつた。

「君のところへ呼びに行きはしなかつたかね。もしそうだったら勘弁してくれたまえ。」
 「ム。ハハハ。ナニ、ちようど、話しに来ようと思つていたのサ。」

主客の間にこんな挨拶が交されたが、客は大きな茶碗の番茶をいかにもゆつくりと飲乾す、その間主人の方を見ていたが、茶碗を下へ置くと、

「君は今日最初辞退をしたネ。」
 と軽く話し出した。

「エエ。」

と主人は答えた。

「なぜネ。」

「なぜッて。イヤだったからです。」

「御前へ出るのにイヤってことはあるまい。」

ホンの会話的の軽い非難だったが、答えは急遽しかった。

「御前へ出るのにイヤの何のと、そんな勿体ないことは夢にも思いません。だから校長に負けてしまいました。」

「ハハア、校長のいいつけがイヤだったのだネ。」

「そうです。だがもう私がすぐに負けてしまったのだから論はありません。」

「負けた負けたというのが変に聞えるよ。分らないネ。校長が別に無理なことを云つたとも私には思えないが。私も校長のいいつけで御前製作をして、面目をほどこしたことがあるのは君も知っててくれるだろうに。」

と、少し面をおもてあげて鬚をしごいた。少し兄分振っているようにも見えた。しかし若崎の何か勘ちがいをした考を有っているらしい蒙を啓いてやろうというような心切から出た言葉に添った態度だったので、いかにも教師くさくは見えだが、威張っているとは見えな

った。

若崎は話しの流れ方の勢で何だか自分が自分を弁護しなければならぬようになったのを感じたが、貧乏神に執念く取憑かれたあげくが死神にまで憑かれたと自ら思ったほどに浮世の苦酸を嘗めた男であったから、そういう感じが起ると同時にドッコイと踏止ま
ることを知っているので、反撃的の言葉などを出すに至るべき無益と愚との一步手前で
自ら省みた。

「ヤ、あの鶏は実に見事に出来ましたネ。私もあの鶏のような作がきつと出来るとい
のなら、イヤも鉄砲も有りはしなかつたのですがネ。」

と謙遜の布袋の中へ何もかも抛り込んでしまふ態度を取りにかかつた。世の中は無
事さえあれば好いというのなら、これでよかつたのだ。しかし若崎のこの答は、どうし
ても、何か有るのを露わすまいとしているのであると感じられずにはいない。

「きつと出来るよ。君の腕だからナ。」

と軽い言葉だ。善意の奨励だ。赤剥きに剥いて言えば、世間に善意の奨励ほどウソの
ものは無い。悪意の非難がウソなら、善意の奨励もウソである。真実は意の無いところに
在る。若崎は徹底してオダテとモッコには乗りたくないと平常思っている。客のこの言

葉を聞くとブルツとするほど厭いやだった。ウソにいじりまわされている芸術ほどケチなものは無いと思つてゐるからである。で、思わず知らず鼻のさきで笑うような調子に、
「腕なんぞで、君、何が出来るかね。僕等ぼくらよりズツト偉えらい人だつて、腕なんかがアテになるものじゃあるまい。」

と云つた。何かが破裂はれつしたのだ。客はギクリとしたようだったが、さすがは老骨ろうこつだ。禅ぜん宗しゅうの味噌みそすり坊主ぼうずのいわゆる脊梁骨せきりょうこつを提起ていきした姿勢しせいになつて、

「そんな無茶なことを云い出しては人迷ひとまよわせだヨ。腕で無くつて何で芸術が出来る。まして君きみなぞ既すでにいい腕になつてゐるのだから、いよいよ腕を磨みがくべしだネ。」

戦鬪せんとうが開始されたようなものだ。

「イヤ腕を磨くべきはもとよりだが、腕で芸術が出来るものではない。芸術は出来るもので、こしらえるものでは無さそうだ。君の方ではこしらえとおせるかも知れないが、僕の方や窯業ようぎようの方の、火の芸術にたずさわるものは、おのずと、芸術は出来るものであると信じがちだ。火のはたらきは神秘靈奇しんぴれいきだ。その火のはたらきをくぐつて僕等の芸術は出来る。それを何ということだ。鑄金ちゅうきんの工作過程かていを実地じつちにご覧に入れ、そして最後には出来上つたものを美術として美術学校から献けんじょう上じょうするという。そううまく行くべきもの

だか、どうだか。むかしも今も席画というがある、席画に美術を求めることの無理で愚^ぐなのは今は誰しも認^{みと}めている。席上鑄金に美術を求める、そんな分らない校長ではないと思つていたが、校長には校長の考えもあるうし、鑄金はたとい蠟^{ろう}型^{がた}にせよ純粹美術とは云い難いが、また校長には把掖^{はえき}誘導^{ゆうどう}啓^{けい}発^{はつ}播^{ばつ}擢^{てき}、あらゆる恩^{おん}を受けているので、実はイヤダナアと思つたけれども枉^まげて従つた。この心持がせめて君には分つてもらいたいのだが……」

と、中頃は余り言いすごしたと思つたので、末にはその意を濁^{にご}してしまった。言つたとて今更どうなることでも無いので、凶に乗つて少し饒舌^{しやべ}り過ぎたと思つたのは疑いも無い。

中村は少し凹^{へこ}まされたかども有るが、この人は、「肉の多きや刃^{やいば}その骨に及^{およ}ばず」という身体^{からだ}つきの徳^{とく}を持っている、これもなかなかの功^{こう}を経ているものなので、若崎の言葉の中心にはかまわずに、やはり先輩ぶりの態度^{たいど}を崩^{くず}さず、

「それで家^{うち}へ歸つて不機嫌^{ふきげん}だったというのなら、君はまだ若過ぎるよ。議論^{ぎろん}みたようなことは、あれは新聞屋や雑誌屋^{ざっしや}の手合にまかせておくサ。僕等は直接に芸術の中に居るのだから、堀^{へい}の落書^{らくがき}などに身を入れて見ることは無いよ。なるほど火の芸術と君は云うが、最後の鑄^いるといふ一段だけが君の方は多いネ。ご覧に入れるには割が悪い。」

と打解けて同情し、場合によつたら助言でも助勢でもしてやろうという様子だ。

「イヤ割が悪いどころでは無い、熔金ゆけを入れるその時に勝負が着くのだからネ。機嫌きげんが甚ひどく悪いように見えたのは、どういふものだか、帰りの道で、吾家うちが見えるようになってフト気き中あたりがして、何だか今度の御前製作は見事に失敗するように思われ出して、それで一倍鬱うつくつ屈くつしたので。」

「氣アタリという奴やつは厭いやなものだネ。わたしも若い時分には時々そういうおぼえがあつたが。ナーニ必ず中るとばかりでも無いものだよ。今度の仏ぶつ像ぞうは御首みくしをしくじるなんと予感おおきして大おおにシヨゲていても、何のあやまちも無く仕上つて、かえつて褒めほられたことなんぞもありました。そう氣きにすることも無いものサ。」

と云いかけて、ちよつと考え、

「いつたい、何を作ろうと思ひなすつたのか、まだ未定なのですか。」

と改たずまつたように尋ねた。

「それが奇き妙みょうで、学校の門を出るとすぐに題だいが心に浮んで、わずかの道の中ですつかり姿すがたが纏まとまりました。」

「何を……どんなものを。」

「鷺鳥がちょうを。二羽わの鷺鳥を。薄い平ひらめな土坡どばの上に、雄おすの方は高く首あを昂あげてい、雌めすはその雄に向むつて寄よつて行いこうとするところです。無論もちろん小さく、写しゃ生せい風ふうに、鑄いはだ膚だで十二分じふにぶんに味あじを見せて、そして、思いきり伸のばした頸くびを、伸のばしきつた姿すがたの見みゆるように随ずい分ぶん細こく」と話わすのを、こつちも芸術家げいじゆつかだ、眼めをふさいで瞑めい想そうしながら聴きいていると、ありありとその姿すがたが前まへに在あるように見みえた。そしてまだ話わをきかぬ雌めすまでも浮ういて見みえたので、

「雌めすの方かたの頸くびはちよいと一いっトうねりしてネ、そして後足あひその爪つめと踵かかととに一いっト工夫くわふがある。」
 というと、不思議ふしぎにも言いい中あてられたので、

「ハハハ、その通りその通り。」

と主人しゅじんは爽さわやかに笑わらつた。が、その笑わら声こゑの終つひらぬ中うちに、客きやくはフト氣中きちゆうりがして、鷺鳥がちょうが鑄い損そんじられた場合ばいばいを思おもつた。デ、好このい図ずですネ、と既に言いおうとしたのを吞のんでしまった。

主人しゅじんは、

「氣中きちゆうりがしてもしなくても構かまいませんが、ただ心配しんぱいなのは御前ごぜんですから。せつかくご天覽てんらんいただいているとところで失敗しつぱいしては堪たりませんよ。と云いつて火ひのわざですから、失敗しつぱいせぬよう理詰りづめにはしますが、その時ときになつて土つちを割わつてみない中うちは何なにとも分わりません。何なにだか御前ごぜんで失敗しつぱいするような氣きがすると、居いても立たつても居いられません。」

中村は今現げんに自分にも変な気がしたのであつたから、主人に同情せずにはいられなくなつた。なるほど火の芸術は！ 一切いっさい芸術の極きよくち致は皆そうであろうが、明らかに火の芸術は腕ばかりではどうにもならぬ。そこへ天覧という大きなことがかぶさつて来ては！ そこへまた予感という妖あやしいことが湧わきあ上つては！ 嗚呼ああ、若崎が苦しむのも無理は無い。と思つた。が、この男はまだ芸術家になりきらぬ中、香具師やし一流の望のぞみに任せて、安直やすに素張すらしい大仏を造つたことがある。それも製作技術の智慧からではあるが、丸太まるたを組み、割竹わりだけを編み、紙はを貼り、色を傳つけて、インチキ大仏のその眼の孔あなから安房上総あわかつさまで見ゆるほどなのを江戸えどに作つたことがある。そういう質たちの智慧のある人であるから、今ここに於いて行詰まるような意気地いくじ無しではなかつた。先輩として助言した。

「君、なるほど火の芸術は厄やつかい介だ。しかしここに道はある。どうです、鷺鳥だからむずかしいので。蟾ひきがえる 蜾みにくと改題してはどんなものでしょう。昔むかしから蟾蜍の鑄物すいてきは古い水滴すいてきなどにもある。醜みにくいものだが、雅はあるものだ。あれなら熔金ゆの断きれるおそれなどは少しも無くて済む。」

好意からの助言には相違無いが、若崎は侮ぶじよく辱くされたように感じでもしたか、「いやですナア蟾蜍は。やっぱり鷺鳥くろしで苦くるみましようヨ。」

と、悲しげにまた何だか怨みつぽく答えた。

「そんなに鷺鳥に貼くこともありませんまい。」

「イヤ、君だつてそうでしょうが、題は自然に出て来るもので、それと定まつたら、もうわたしには棄てきれませぬ。逃げ道のために蝦蟇の術をつかうなんていう、忍術のよ
うなことは私には出来ません。進み進んで、出来る、出来ない、成就不成就の紙一重
の危い境に臨んで奮うのが芸術では無いでしょうか。」

「そりやそういえば確にそうだが、忍術だつて入卜用のものだから世に伊賀流も甲賀
流もある。世間には忍術使いの美術家もなかなか多いよ。ハハハ。」

「御前製作ということでさえ無ければ、少しも屈托は有りませんがナア。同じ火の芸術
の人で陶工の愚齋は、自分の作品を窯から取出す、火のための出来損じがもとより出来
る、それは一々取つては抛げ、取つては抛げ、大地へたたきつけて微塵にしたと聞いてい
ます。いい心持の話じやありませんか。」

「ムム、それで六兵衛一家の基を成したというが、あるいはマアお話じや無いかね。」

「ところが御前で敲き毀すようなものを作つてはなりません、是非とも気の済むようなも
のを作つてご覧をいたただかねばなりません。それが果して成るか成らぬか。そこに脊骨が

絞られるような悩みが……」

「ト云うと天覧を仰ぐということが無理なことになるが、今更野暮を云つても何の役にも立たぬ。悩むがよいサ。苦むがよいサ。」

と断崖から取つて投げたように言つて、中村は豪然として威張つた。

若崎は勃然として、

「知れたことサ。」

と見かえした。身体中に神経がピンと緊しく張つたでもあるように思われて、円味のあるキンキン声はその音でも有るかと思えた。しかしまたたちまちグツタリ沈んだ態に反つて、

「火はナア、……火はナア……」

と独り言つた。スルト中村は背を円くし頭を低くして近々と若崎に向い、声も優しく細くして、

「火の芸術、火の芸術と君は云うがネ。何の芸術にだつて厄介なところはきつと有る。僕の木彫だつて難関は有る。せつかくだんだんと彫上げて行つて、も少しで仕上になるという時、木の事だから木理がある、その木理のところへ小刀の力が加わる。木理によ

つて、薄いところはホロリと欠けぬとは定まらぬ。たとえば矮鶏の尾羽の端が三分五分欠けたら何となる、鶏冠の蜂の二番目三番目が一分二分欠けたら何となる。もう繕いようもどうしようも無い、全く出来損じになる。材料も吟味し、木理も考え、小刀も利味を善くし、力加減も気をつけ、何から何まで十二分に注意し、そして技の限りを尽して作をし、木の理というものは一々に異う、どんなところで思いのほかホロリと欠けぬものでは無い。君の熔金の廻りがどんなところで足る足らぬが出来のものと同じことである。万一異なるところから木理がハネて、釣合を失えば、全体が失敗になる。御前でそういうことがあれば、何とも仕様は無いのだ。自分の不面目はもとより、貴人のご不興も恐多いことでは無いか。」

ここまで説かれて、若崎は言葉も出せなくなつた。何の道にも苦みはある。なるほど木理は意外の業をする。それで古来木理の無いような、粘りの多い材、白檀、赤檀の類を用いて彫刻するが、また特に杉檜の類、刀の進みの早いものを用いることもする。御前彫刻などには大抵刀の進み易いものを用いて短時間に功を挙げることにする。なるほど、火、火のみ云つて、火の芸術のみを難儀のもののように思っていたのは浅はかであつたと悟つた。

「なるほど。何の道にも苦しい瀬戸はある。有難い。お蔭で世界を広くしました。」
と心からしみじみ礼を云つて頭を畳へすりつけた。中村も悦ばしげに謝意を受けた。

「ところで若崎さん、御前細工というものは、こういう難儀なものなのに相違無いが、木彫その他の道において、御前細工に不首尾のあつたことはかつて無い。徳川時代、諸大名の御前で細工事ご覧に入れた際、一度でも何の某があやまちをしてご不興を蒙つたなどということは聞いたことが無い。君はどう思う。わかりますか。」

これには若崎はまた驚かされた。

「一度もあやまちは無かつた!」

「さればサ。功名手柄をあらわして賞美を得た話は折々あるが、失敗した談はかつて無い。」

自分は今天覧の場合の失敗を恐れて骨を削り腸を絞る思をしているのである。それに何と昔からさような場合に一度のあやまちも無かつたとは。

「ムーツ。」

と若崎は深い深い考に落ちた。心は光りの飛ぶごとくにあらゆる道理の中を駈巡つたが、何をとらえることも出来無かつた。ただわずかに人の真心——誠——というものの一切に超

越えつして靈れい力りよくあるものということを思い得て、

「一心の誠というものは、それほどまでに強いものでしょうかナア。」

と真顔になつて尋ねた。中村はニヤリと笑つた。

「誠はもとより尊たつとい。しかし準備もまた尊たつといよ。」

若崎には解釈出来なかつた。

「竜りゆうなら竜、虎とらなら虎の木彫をする。殿との様さま御前ごぜんに出て、鋸のこぎり、手斧ちような、鑿のみ、小刀を使つて

だんだんとその形を刻きざみ出いす。次第に形がおよそ分明になつて来る。その間には失敗は無

い。たとい有つたにしても、何とでも作意を用いて、失敗の痕あとを無くすことが出来る。時

刻が相応に移る。いかに物好きな殿にせよ長くご覧になつておらるる間には退たい屈くつする。そ

こで鱗うろこなら鱗、毛なら毛を彫つて、同じような刀法を繰くり返かえす頃になつて、殿にご休息を

なさるよう申す。殿は一度お入りになつてお茶など召させらるる。準備が尊たつといのはここで

かねて十分に作りおいたる竜なら竜、虎なら虎をそこに置き、前の彫りかけを隠かくしておく。

殿復ふたびお出でましの時には、小刀を取つて、危あぶ気なげ無なきところを摩なずるようしに削り、小

刀ようの刃かたを出し、やがて成就よしの由よしを申し、近々ほうけいご覧に入るのだ。何の思しわぬあや

まちなどが出来よう。ハハハ。すりかえの謀ほうけい計けいである。君の鑄物みずおけなどは最後は水桶みずおけの

中で型の泥どろを割つて像を出すのである。準備さえ水桶の中に致しておけば、容易しなんに至難しなんの作品でも現あらわすことが出来る。もとより同人の同作、いつわり、贗物がんぶつを現あらわすということでは無い。」

と低い声で細々こまこまと教えてくれた。若崎わかしきは啞然あぜんとして驚いた。徳川期にはなるほどすべてこういう調子の事が行われたのだなと暁さとつて、今更ながら世の清濁せいだくの上に思を馳はせて感か悟んごした。

「有難うございました。」
と慄ふるえた細い声で感謝した。

その夜若崎は、「もう失敗しても悔くいがない。おれは昔の伶俐りこうもの者ではない。おれは明治めいじの人間だ。明治の天子様は、たとえ若崎が今度失敗しても、畢ひつきよう竟みとは認めて下さることを疑うたがわない」と、安心立命あんしんりつめいの一境地に立って心中に叫んだ。

○

天皇てんのうは学校に臨幸りんこうあらせられた。予定のごとく若崎の芸術をご覧あつた。最後に至

つて若崎の鷺鳥は桶の水の中から現われた。残念にも雄の鷺鳥の頸は熔金のまわりが悪く断れていた。若崎は拝伏して泣いた。供奉諸官、及び学校諸員はもとより若崎のあの夜の心の叫びを知ろうようは無かった。

しかし、天恩洪大で、かえつて芸術の奥には幽眇不測なものがあることをご諒知下された。正直な若崎はその後しばしば大なるご用命を蒙り、その道における名譽を馳するを得た。

(昭和十四年十二月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 幸田露伴」筑摩書房

1992（平成4）年3月20日第1刷発行

底本の親本：「露伴全集」岩波書店

入力：林 幸雄

校正：門田裕志

2002年12月5日作成

2004年7月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鷺鳥

幸田露伴

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>